

24/7の祈りの家ですか？

「ダビデの幕屋回復」の落とし穴

最近、日本のプロテスタント聖霊派の中で、「24時間祈りの家」に取り組む教会が増えてきました。この祈りのムーブメントは、アメリカのカンザス州にあるIHOP(International House Of Prayer)から広まりました。その賛美と祈りのスタイルは「ハープ&ボウル」と呼ばれ、ダビデ時代の24時間賛美礼拝の回復であると説明されています。1日24時間、週7日間、世界中の花嫁・教会が、途切れることなく主の御顔を慕い求めて賛美し、断食し、熱心に祈ることで、主と共にこの世界に裁きをもたらし、主の再臨を早めることができると教えられています。

けれどもこの教えは、使徒15章の「倒れたダビデの幕屋を建て直す」という御言葉を、「賛美礼拝の回復」と誤って解釈したことから始まったもので、聖書が教えている「回復」の内容とは異なります。そして聖書理解が間違っているだけでなく、現在流行中のこのムーブメントには、霊性面での問題もあるのです。キリストの御身体なる教会が健全な祈りと賛美に導かれることを願い、この文章では、「ダビデの幕屋回復」の本来の聖書的意味は何かを説明し、またこのムーブメントに伴う霊的な危険性と、現実には生じている問題とを指摘します。

1. 「ダビデの幕屋の回復」が引用された文脈

初めに、24時間祈りの家の根拠とされる使徒15章の御言葉を見ましょう。

使徒15：16～18

この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。」

「倒れたダビデの幕屋を立て直す」という預言が引用された背景と目的はどんなものだったのでしょうか？

使徒15：1～2

さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。

使徒の働き15章のこの場面は、AD49年、エルサレムにおける使徒会議です。会議の議題は、異邦人信者の割礼問題でした。

異邦人が福音を聞き、イエスをメシアと信じて聖霊を受けた。異邦人信者に割礼を施し(ユダヤ教に改宗させ)、律法を守り行わせるべきか、無割礼の異邦人のままメシア共同体に受け入れるべきか。

- ・当時のユダヤ人にとってイスラエル民族だけが神の民であり(割礼はその証拠)、異邦人がイスラエルの神とつながるためには、割礼を受けてユダヤ教徒に改宗する必要がありました。
- ・救われた異邦人信者たちは、以前からユダヤ教の会堂に通い、トーラー朗読とラビの説教を聞き、イスラエルの神を礼拝する「神を畏れる異邦人」でした。聖書の教えを理解し、信仰の基礎があつて、教えを守り、祭りにも参加し、救い主を待ち望んでいました。

・割礼を受けることは、当時も現代も、異邦人成人男性にとっては高いハードルです。現代でも、ユダヤ教の改宗者になるためには、ヘブライ語の読み書き、トーラー暗記、安息日・祭り・食物規定を守った上で、テスト期間を経て合格し、割礼を受けなければなりません。

*つまり、「ダビデの幕屋の回復」という表現は、イエス様を救い主と信じて救われた異邦人信者に割礼を受けさせるべきかどうか、結論を出すために引用されたのでした。

2. 使徒たちが理解した「ダビデの幕屋の建て直し」はイスラエル国家の再建

使徒 15 章 7 節から、激しい論争があり、ペテロが立ち上がって言いました。

「神が異邦人にも聖霊を与え、異邦人を差別せず、心を信仰によって聖めてくださったのだから、負いきれないくびきをかける必要がない(つまり、割礼は必要ない)。 」

ヤコブは、それを保証するためにアモス書を引用しました。

「預言者たちの言葉もこれと一致しており、それにはこう書いてあります。『この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めようになるためである。大昔からこれらのことを知らせておられる主が、こう言われる。』」

使徒 15:16～18 は、アモス 9:11～12 の新約的解釈です。

その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起こし、その破れを繕い、その廃墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す。これは彼らが、エドムの残りの者と、わたしの名がつけられたすべての国々を手に入れるためだ (アモス 9:11～12)。

当時、使徒たちは、イエス様がすぐに戻って来て御国が始まる——ダビデのメシア的王国を世界に設立する——と考えていました。「倒れたダビデの幕屋を建て直す」は「イスラエル再建」という意味です。

使徒 1 章 6 節で弟子たちは、復活されたイエス様に

「今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか」と質問しています。

主がすぐにローマ軍を追い出し、ダビデとソロモンの時代のように国を復興してくださると期待したのです。

それに対してイエス様は、世界に福音が述べ伝えられることこそ優先事項であると語られました。

「いつとか、どんなときかということは、あなたがたは知らなくても良いのです。・・・聖霊があなたがたの上に望まれる時、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」

そしてペテロやパウロの伝道により、異邦人がイエス様を信じて救われ始めました。

エルサレム会議の結論のため、ヤコブの判断が採用されました。

「アモスの預言によれば、神の御子イエス様が王となってイスラエルのために国を再興してくださるのは、『わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めようになるため』だから、イエスの御名を信じて救われた異邦人信者は、異邦人のままでよい。割礼を受ける必要はない。」

3. アモスが預言したのは「メシアによるダビデ王朝の回復」

アモスの預言から「ダビデの天幕の回復」の意味を探ってみます。2つのことが預言されています。

- ① イスラエル民族の偶像礼拝と背信のため、北イスラエル王国はアッシリアにより滅ぼされ、南ユダ王国とエルサレムはバビロンによって侵略される。ソロモン神殿が破壊され、ユダヤ人は捕囚となり、ダビデ王朝は崩壊し、ユダヤ人は厳しい裁きと屈辱を受ける。
- ② その後、主の回復の 때가訪れ、倒れていたダビデ王朝が復興し、イスラエル民族は回復される。

アモスが預言した「ダビデの倒れている仮庵を起こす」の意味は、次のように理解することができます。

9：11「その日、わたしはダビデの倒れている仮庵を起こし、その破れを繕い、その廃墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す」

——途絶えていたダビデ王朝の子孫が王位に就き、イスラエル国家とエルサレムを再建する。

かつてのように、首都エルサレムは政治的権威を取戻し、霊的中心地として回復する。

9：12「これは彼らが、エドムの残りの者と、わたしの名がつけられたすべての国々を手に入れるためだ。」

——再建されたイスラエルに、エドム(異邦人・イスラエルの神を信じる諸国)が加えられる。

イスラエル王国を通して全地に神の主権が回復し、神の支配が世界の国々に及ぶようになる。

「ダビデの倒れている仮庵を起こし、国々を手に入れる」の本来の意味は、「ダビデ王の子孫がイスラエル王国を復興し、異邦の諸国民もイスラエルに加えられる」ということでした。

ですから、使徒 15 章でアモス預言が引用された目的は、

「異邦人もイエス・キリストをメシアと信じる信仰によって救われ、イスラエルの神の民に加えられる。新契約はイスラエル民族だけでなく、諸国諸民族にも拡大された」ことを確認するためでした。

他の旧約の預言者達も、このことを預言しました。

エレミヤ 23：5～6

その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行う。…その王の名は、「主は私たちの正義」と呼ばれよう。

イザヤ 11 章 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。… エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

イザヤ 2：1～4

シオンからみ教えが出、エルサレムから主のことばが出る。主は国々を裁き、判決を下す。

ゼカリヤ 8：20～23

国々の民、国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来る。

* 異邦人が信仰によってイスラエルの神の民に加えられることは、「ダビデの幕屋の回復」の始まりにすぎません。異邦人の救いとイスラエルの救いが完成する時、ダビデの幕屋の最終的な回復——メシアの統治による神の御国——が実現します。

4. イスラエルの歴史における「ダビデ王の幕屋礼拝」が教えていること

ダビデ王の幕屋が建てられた歴史的経緯と、ダビデの賛美礼拝の意味についてまとめます。

預言者サムエルの時代、祭司エリの息子(ホフニ、ピネハス)は墮落し、罪を犯していました。そのため、シロの会見の天幕から持ち出された神の臨在の箱(契約の箱)は、ペリシテ人に奪われてしまいました(Ⅰサムエル4章)。契約の箱を失ったシロも破壊されたため、会見の天幕(幕屋と祭壇)はギブオンに移り、モーセ律法に基づいていけにえが捧げられていました(ユダヤ教礼拝の中心地)が、契約の箱は20年以上イスラエルに戻りませんでした。

その後、返還された契約の箱は、キルヤテ・エアリムに20年間とどまりました。ダビデが箱を運び出した時、運び方の不手際でウザが打たれて死に(Ⅱサムエル6章)、ダビデが自分の町に箱を運び帰ることを恐れたため、箱はオベデ・エドムの家さらに3か月とどめられました。

その後、契約の箱は、ダビデが一時的に建てた天幕に治められました(Ⅰ歴代誌15:1)。契約の箱が戻ったことを喜んだダビデは、裸になって主の前に踊り、祭司とレビ人を任命して、毎日契約の箱の前で感謝と賛美の音楽を捧げさせました(Ⅰ歴代誌16:4~6)。

ダビデは神の箱のために神殿建設を願いましたが、戦いで多くの血を流していたため、主に許可していただく(Ⅱサムエル7章)、建設はソロモンに委ねられました(Ⅰ歴代22章)。

ソロモンが指示通りの神殿を建てて奉獻し、ギブオンとダビデの町に分離していた会見の天幕と契約の箱が同じ一つの神殿に統合された時、祭司が立って仕えることができないほどの神の栄光が満ちました(Ⅰ列王8:10)。神の箱は約50年ぶりに会見の天幕(神殿)に戻り、祭司が動物犠牲を捧げる場所と神の臨在される場所が一つとなり、神様がこれを喜んでおられることが目に見える形で表わされました。

*ダビデ王は、神の臨在の箱がイスラエルに戻ってきたことを喜び、たくさんの賛美の歌を捧げ、主を礼拝しましたが、ダビデの天幕は、神殿ができるまで30年間の一時的な個人的礼拝場所にすぎず、イスラエルの歴史では例外的なものでした。

けれども、ダビデの幕屋礼拝は、将来のはるかに素晴らしい礼拝を予見させてくれます。それは、イエス様が再臨され、エルサレムの王座からイスラエルと全世界を治める時、主の臨在と栄光が全地に満ち、私たちは主の御顔を拝し、偉大なる王をほめたたえ、感謝と喜びの礼拝を捧げるということです。

5. 24時間の賛美と祈りのムーブメントに潜む危険

正しい心で捧げる賛美と祈りは主に喜ばれ、受け入れられるものです。けれども、教えが異なり、祈り方も間違っていると、異なる霊を招く原因にもなるため、気を付ける必要があります。

① 瞑想的な祈りで脳の状態が変わると、異なる霊を招きやすくなります。

瞑想的祈りとは、知性を用いて御言葉に基づいて祈る代わりに、単純なフレーズや異言？を繰り返し、頭を空っぽにして何も考えず、感覚的に霊と交わり、霊的体験を求める祈り方です。ヒンズー教やニューエイジでは「マントラの祈り」と呼ばれ、神秘主義宗教の祈り方です。健康ヨガがブームとなっていますが、ヨガ本来のポーズは、ヒンズー教の神と合体するために使われる祈りの姿勢です。

キャンドルを灯し、香を炊き、音楽や照明で情緒的に雰囲気を作り、静まって祈る祈り方もあります。そのような手法を用いて特殊な精神状態になると、幻や預言や感覚的体験に導かれることがあります。脳波が変わると異なる霊を受け入れやすくなり、身体への現象や癒しなどが起こることもあります。

カトリックでは、祈りのビーズを用いて数を数えながら、同じフレーズを繰り返して祈ることがあります。「ハレルヤ」も、知性を排除して無意識に繰り返していると、瞑想的な効果があるそうです。賛美も、同じフレーズを同じメロディーで何度も繰り返すなら、そのように感覚的な体験をするようになっていきます。主は、「祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。」と言われました。

② 聖書の間違った解釈は、間違った終末論に行き着きます。

誤った聖書解釈が、高ぶり・間違った熱心さ・異なる信仰・異なる霊との関係につながることがあります。IHOPのマイク・ビックルが主張するように、自分たちは特別な啓示を受けた祈りのエリートであり、世界中の教会がIHOPと連動して24時間の祈りの家の働きをするなら、教会が不信者の世界に大患難を引き起こし、反キリストに裁きをもたらし、再臨を早めることができるというのは聖書的な教えではありません。教会の力で全世界をキリスト教化し、政治・経済・教育・軍事など7つの山(分野)を征服し、キリスト教の支配が完成した時に主が再臨され、世界を受け取られる、というのも聖書的終末観とは全く異なっています。聖書は、神のわざは主の主権によるものであり、人間のわざはむしろ排除するように教えています。

独自の終末論を考え出し、天国を訪問し、イエス様とお会いして、特別な啓示と権威を与えられたと主張する使徒と預言者のもとで、教団・教派を解体してキリスト教界を再編成し、自分たちの考え方に賛同しないクリスチャンを取り除くという考え方はカルト的です。

③ IHOPの教えと神学校は異端化とカルト化が指摘されています。

日本ではほとんど知られていませんが、英語圏の異端・カルトを見張るたくさんの団体がIHOPを危険視しており、正統なキリスト教とは異なるキリスト教系新興宗教、カルトとの警告を発している団体もあります。

IHOPのミニストリーはマイク・ビックルに与えられた預言から始まり、天国体験・幻などによって導かれ、霊的に飢え乾き、意欲的で熱心な20代の若者達が、使命感を持って賛美と祈りのために集められました。

IHOPの元神学生たちの証によると、過激な断食、早朝から夜中までの過密なスケジュール、祈りの部屋での祈りと奉仕の義務などが課され、生活や行動は規制され、啓示・幻・預言が重視されていたそうです。常に音楽の流れる部屋で祈らなければならない、静かな部屋で祈ることや言葉で明確に祈ることはできなかったそうです。黙示録と雅歌の教えは正統な聖書理解からかけ離れ、IHOP用語集が作られるほど語意も異なっていますが、教えに反論することは許されず、聖書を自分で学んで熟考する時間も与えられなかったため、教理的に混乱したり、心身を病んだり、信仰を失ったりする神学生が続出しました。

雅歌を独特に解釈し、花嫁と花婿の親密さを強調するため、主との親密さを求めて性的倒錯に陥り、男性セルグループの同性愛、セル・リーダーの新妻の自殺事件が起こりました。その後、セル・メンバーの1人がリーダーの命令によって殺害したことを自白しましたが、それは預言によって脅迫されての偽りの自白で、事実は自殺であったと判明し、これら一連の不可解な事件が一般のニュースにも取り上げられ、混乱を引き

起こしました。最終的には、IHOP 神学生たちが件のセルのメンバーたちを取り囲み、悪霊追い出しの祈りをしてセルは解散、メンバー数人と預言をした神学生が退学して幕引きとなりました。

現在は神学校改革が進み、学生たちの環境は改善されていると思われませんが、脱会した元 IHOP 神学生によると、祈りの部屋で使われていた音楽を聴いただけで、靈的精神的に当時の状態に引き戻される体験をしたとのこと、祈りと賛美のスタイルによっては靈的依存症のようになることが確認されています。

聖書理解が異なる上、瞑想的・ニューエイジ的な祈り方を繰り返していると、異なる靈を招き入れたり、正しい信仰から逸脱したりすることになると多くの専門家が指摘していますので、注意が必要です。

6. これから訪れる本当の「ダビデの幕屋の回復」

ダビデ王が神の箱の前で賛美し、レビ人たちに毎日賛美と礼拝を捧げさせた理由は、50 年間失われていた神の臨在の箱が戻って来たことを心から喜んだからでした。けれども、IHOP が勧める「ダビデの幕屋」は、世界中の教会が「24/7 の祈りの家」に賛同し、花婿を呼び求めるならイエス様が戻って来られるというもので、ダビデ王の礼拝の動機とは正反対の考え方です。このように、断食や祈りや熱心さで主の再臨を早め、人間の力で神の計画を実現させようとするなら、肉を誇り、新たな律法主義を作りだすことにもなりかねません。それは、一部の熱心すぎるユダヤ人たちが、「もし全世界のユダヤ人が、たった 1 日でも完全に律法を守ったならメシアが来られる」と考えて、人間の作った安息日の細則や食物規定を徹底的に守ろう、守らせようとすることに似ています。

聖書によると、主の再臨前には次の 2 つのことが起こります。

- ① 福音が全世界に伝えられ、すべての民族に証される。
- ② イスラエル民族が、イエス・キリストをイスラエルの王・メシアとして呼び求める。

「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません (マタイ 23 : 38~39)。」

これは、イエス様がメシアであるという数々のしるし・不思議を見たにもかかわらず、イエス様を憎み、民衆を救い主から遠ざけようとしたパリサイ人などの宗教指導者たちに向かって、主が言われた言葉です。

イエス様が十字架に架かれる前の日曜日、民衆は棕櫚の枝を振りながら、『ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に』と、ろばの子に乗ってエルサレムに入場されるイエス様を歓迎しました。民衆はイエス様を王なるメシアとして喜んでお迎えしたのです。

けれども、宗教指導者たちの不信仰と反逆のため、イスラエルは国家としては裁かれ、エルサレム神殿は破壊され、国が滅び、民族は世界中に離散してしまいました。主は、イスラエルの靈的リーダーたちが悔い改め、イエス様をメシアと認めて迎え入れる時まで、イエス様を見ること(主の再臨)は無いと語られたのです。

ダビデの天幕が真に回復するためには、イスラエル民族、特に宗教指導者たちが「2千年前、先祖たちが十字架に付けたイエス様こそ、待ち望んでいたメシアであった！」と気付いて悔い改め、イエス様をダビデの王位に就くイスラエルの王としてお迎えしなければなりません。

* 主が再臨され、神ご自身が王となり、エルサレムから世界を治める時、神の人類救済計画が完成します。救い主イエス様を信じたイスラエル人と異邦人クリスチャンが1人の新しい人・キリストの花嫁となり、アダムの失敗以来の人類の墮落と呪いが取り除かれ、クリスチャンにとっての希望である「義と平和と愛と祝福に満ちた神の御国」が始まります。アモス預言の「ダビデの幕屋」は、神と人とが共に住む千年王国で完成します。

7. 聖書的で健全な、主に喜ばれる祈りを！

初代教会は、家々や宮に集まって主の御顔を慕い求め、賛美し、祈っていただけではありませんでした。外に出て、御国の福音と救い主イエス様を熱心に宣べ伝えました。「イエスの名によって語ったり、教えたりしてはならない」と命じられると、かえって、「大胆に御言葉を語らせ、癒しをなさせ、しるしと不思議な業を行わせてください」と、宣教の前進を祈り求め、聖霊と力に満たされて出て行き、福音を語りました。聖霊に満たされる目的は、個人的な霊との交わりや満足感のためではなく、力を受けて宣教するためでした。

パウロは、主の再臨が近いからと何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締まりのない歩み方をしていたテサロニケの信徒たちに手紙を書き(Ⅱテサロニケ 3:6~12)、

「自分の手で働き、落ち着いた生活を志し、自分で得たパンを食べなさい。外部の人に対してもりつぱにふるまい、乏しいことの無いようにしなさい。働きたくない者は食べるな」と戒めました。

そしてパウロ自身が昼も夜も労苦して自分の手で働きながら伝道し、模範を示しました。

主は私たちにも、教会内で賛美し、祈り、礼拝するだけでなく、社会に出て働き、人々を助け、良い行いを通して主を証し、光となって輝くことを願われています。

私たちの神様は、「耳のある者は聞きなさい」と、御言葉を語られる神様です。主イエス様は、人となって来られた「神の御言葉」です。終末時代に生きる私たちクリスチャンは、聖書に記されている神様のご計画を心に留め、異言で祈るだけでなく、知性も用いて、御言葉の約束を握り、御心が成るように、的を射た祈りを捧げましょう。また、霊的な賛美を捧げるだけでなく、知恵を用いて御言葉を語り、愛と忍耐をもって御国の王と御国の福音を伝えていきましょう。

- 日本の霊的状态を覚え、日本人の救いのために祈りましょう。
- 国々の政治家やリーダーのため、諸国・諸民族の救いのためにも祈りましょう。
- 収穫の働き手のため、また、私たち自身が収穫の働きに用いられるように祈りましょう。
- 教会とクリスチャンが偽りの霊・偽りの教えから守られるように祈りましょう。
- 迫害されているクリスチャンの信仰が守られるように、また迫害する者や侮辱する者が悔い改めて救われるように、派遣されている宣教師の守りや働きの祝福のためにも祈りましょう。
- イスラエルの救いとエルサレムの平和のために、終末の世界情勢を覚え、神のご計画が実現して、主の栄光と主を知る知識が全地を満たすように祈りましょう。

By Ishikawa